J. Fac. Edu. Saga Univ.
Vol. 14, No. 1 (2009) (1)〜(21)

元刊雑劇の研究（六）「新編關目晉文公火燒介子推」全訳校注（前篇）

赤松紀彦・金　文京・小松　謙・佐藤晴彦・荀　春生・
高橋繁樹・高橋文治・竹内　誠・土屋育子・松浦恆雄

The Study on the Texts of Yuan zaju Published in Yuan Dynasty (6)
The Revised Text with Copious Notes and a Complete Translation of *Xinpian Guanmu Jin Wengong Huo Shao JIE Zitui*

Norihiko AKAMATSU, Bunkyo KIN, Ken KOMATSU, Haruhiko SATO, Chunsheng XUN,
Shigeki TAKAHASHI, Bunji TAKAHASHI, Makoto TAKENOUCHI, Ikuko TSUCHIYA, Tsuneo MATSUURA

要　旨

本稿は、中国演劇の現存最古のテキストである「元刊雑劇三十種」（中国国家図書館収蔵）の一作品である「晉文公火燒介子推」に、詳細な注と訳を施したものである。底本として、『古本戯曲叢刊四集』（商務印書館一九五八）所収の影印本を使用したが、近年北京図書館出版社「中華再造善本」シリーズの一つとして出版された複製本も参照した。

なお本稿は、元刊本雑劇研究会の成果に基づくものである。各担当者の原稿をもとに、討論の内容により修正を加えた。全体のまとめは土屋が担当した。なお、「元刊雑劇の研究」（一）〜（四）は『元刊雑劇の研究――三奪槊・氣英布・西蜀夢・單刀會』として二〇〇七年汲古書院より刊行され、「元刊雑劇の研究（五）「李太白貶夜郎」全訳校注（前篇）」は『京都府立大学学術報告　人文・社会』第六十号（二〇〇八年十二月）に掲載されている。

凡　例

①異体字・俗字・誤字も含め、本文の用字については、ひとまず元刊本に出来るだけ忠実な字を用い、その上で校勘を加えることとした。ただし、略字は正字体に改めてある。

②押韻箇所は「。」、韻を踏まない句切れの箇所は「、」で示した。「△」は句中蔵韻（一句の中で更に韻を踏む字があるもの）を示す。

③明らかに字の誤りと思われるものについては、（　）内に正しい字と思われるものを付け加えた。ただし、白話文学の世界で史書とは異なった文字が通常用いられている場合には、改めることはせず、注で指摘するにとどめた。原テキストには存在しないが明らかに脱字があると考えられる場合には、《　》に入れて補うかたちを取った。また明らかに衍字と思われるものには〈　〉を付した。

本劇の校勘に使用したテキストは、鄭騫『校訂元刊雑劇三十種』（世界書局一九六二、鄭本と略称）・徐沁君『新校元刊雑劇三十種』（中華書局一九八〇、徐本と略称）・寧希元『元刊雑劇三十種新校』（蘭州大學出版社一九八八、寧本と略称）である。本劇の伝存テキストは元刊本のみで、異本は存在しない。

なお字体は、原文・引用・人名は繁体字、他は新字を使用した。

新編關目晉文公火燒介子推

〔注〕○「介子推」の作者とされる狄君厚は、天一閣本『録鬼簿』巻上に「狄君厚、平陽人」と記されるほかは生没年など不詳。雑劇作品は本劇のみ。平陽は今の山西省臨汾で、「介子推」の舞台でもある。山西出身の狄君厚が「介子推」の作者であることは、介子推物語の伝承を考える上でも興味深い。賈仲明の「弔詞」には、「元貞大德秀華夷。至大皇慶錦社稷。延祐至治承平世。養人才、編傳奇。一時氣候雲集。有平陽狄君厚、撚火燒介子推。只落得三尺孤堆。（元貞、大德年間は華夷の優秀な者を集め、至大、皇慶年間は社稷を錦にす。延祐、至治年間は太平な世、才能のある人材を養い、伝奇を編み、一時に気が雲のように集まる。平陽の狄君厚が、「火もて介子推を焼く」を書いたが、三尺のぽつんとした墓になってしまった。）」と記されている。○介子推……介子推の故事は、古くは『左傳』「僖公二十四年傳」、『史記』「晉世家」、『呂氏春秋』「介立」に記されているものの、これらには焚死の話は見えない。介子推が焚死する話は、『莊子』「盜跖篇」、『劉向新序』などの文献に見られる。また、介子推は「介之推」「介子綏」「介推」などとも表記される。

《第一折》

〔淨、旦一折〕〔駕上、開住〕〔二太子奏住〕〔旦譜奏了〕〔貶太子了〕〔貶正夫《人》入冷宮住〕〔正末扮介子推披秉□（上）開〕自家介子推、晉朝職當諫議。晉獻公爲君、朝冶里信皇妃麗姬、國舅呂用公所譖、貶東君太子申生、重耳於藿（霍）地爲民、更將正宮皇后齊姜下入冷宮。信麗姬與他兩个太子、大者奚齊、次者卓慈、大者爲云（雲）、次者愛月、奏官里蓋千尺雲月臺、ヌ（臺）上太極宮百二十間、動天下民夫、幾日成功。朝中宰輔、緘口无（無）言、沒一个敢諫官里。似此這般、怎生奈何呵。

〔校〕○二太子……原本では「二」の文字がつぶれており判読しにくい。各本なし。○正夫……鄭本は「正后」、徐本は「正宮」、寧本は「正宮夫人」とする。下の「入」に引かれて「人」を脱したのかもしれない。○正末……原本ではこの二字は白ヌキで刻されている。○秉□……「上」の文字が不明瞭。諸本に従って補う。○麗姬……徐本が『莊子』「毛嬙・麗姬人之所美也」を引いて「驪」に訂正する必要はないというのに従う。○卓慈……徐・寧本は「卓子」に改める。注に引くように史実では「卓子」であるがここは原本のままにしておく。○幾日成功……徐本は「計日程功」、寧本は「即日成功」に改める。

〔注〕○一折……このようにト書きに見える「一折」は、なんらかの芝居か動作をひとくさりすることを示していると考えられる。○二太子……そもそも「太子」は世子、皇太子のみを指していうが、白話文学では公子に対してもよく用いられる。例えば、下文の「兩个太子」や本劇本折【油葫蘆】の「二太子」などがそうである。「二太子」は、二人の太子と二番目の太子の二通りの意味が考えられるが、ここでは性急に判断せず、このままにしておく。○披秉……正装する。元雑劇ではしばしばト書きに使われる。「貶黃州」（干小穀本）第四折［正末披秉上、云］、「遇上皇」（元刊本）第三折［等孤披秉了］など。元末明初の人陶宗儀の『輟耕録』「披秉歌訣」には、正装の順序が次のように記されている。「天子郊祀與祭太廟日、百官陪位者皆法服。凡披秉須依歌訣次第、則免顛倒之

失。歌曰、襪履中單黄帶先、裙袍蔽膝綬紳連、方心曲領藍腰帶、玉珮丁當冠笏全。」（天子が郊外の祭祀や太廟の祭りをする日は、百官たちはみな朝服を身につける。およそ正装は歌の文句にしたがい、間違えないようにした。歌にいう。「靴下と下着と黄色の帯がまず最初、裙袍と服の前垂れがその次、丸い襟飾りに青い腰帯、かちんかちんと玉珮をつけ冠と笏でできあがり」）。○晉獻公爲君……晉のお家騒動については、『左伝』と『史記』に記述がある。『左傳』「荘公二十八年傳」には、「晉獻公娶于賈、無子。烝於齊姜、生秦穆夫人及太子申生。又娶二女於戎、大戎狐姫生重耳、小戎子生夷吾。晉伐驪戎、驪戎男女以驪姫。歸、生奚齊、其娣生卓子。驪姫嬖、欲立其子、賂外嬖梁五與東關嬖五。…（中略）…晉侯説之、夏使大子居曲沃、重耳居蒲城、夷吾居屈。羣公子皆鄙。唯二姫之子在絳。二五卒與驪姫譖羣公子、而立奚齊。晉人謂之二五耦（晉の献公は賈姫を娶ったが子がなかった。（父武公の妾であった）斉姜と通じ、秦穆夫人と太子申生を生んだ。また戎の二人の娘を娶り、大戎狐姫は重耳を生み、小戎子は夷吾を生んだ。晉は驪戎を伐ち、驪戎は驪姫を差し出した。帰国して、奚斉を生み、その妹が卓子を生んだ。驪姫は寵愛を受け、自分の子を跡継ぎに立てたいと思い、外嬖梁五と東関嬖五に賄賂を贈り、晉侯に進言させた。（中略）晉侯は喜んで、太子を曲沃に、重耳を蒲城に、夷吾を屈に居らしめた。他の公子たちは田舎へやられた。ただ戎の二人の姫姓の夫人の子供たちだけは都の絳にいた。そこで外嬖梁五と東関嬖五はついに驪姫と公子たちを讒言して、奚斉を世継ぎに立てた。晉の人たちはこれを「二五藕」と呼んだ）」とある。また、『史記』「晉世家」には、「（獻公）五年、伐驪戎、得驪姫、驪姫弟、俱愛幸之。…（中略）…十二年、驪姫生奚齊。獻公有意廢太子。乃曰、曲沃、吾先祖宗廟所在、而蒲邊秦、屈邊翟。不使諸子居之、我懼焉。於是使太子申生居曲沃、公子重耳居蒲、公子夷吾居屈。獻公與驪姫子奚齊居絳。晉國以此知太子不立也（獻公の五年、異民族の驪戎を伐ち、驪姫とその妹を手に入れて、どちらも寵愛した。（中略）十二年、驪姫が奚斉を生んだ。献公は太子を廃嫡しようと思った。そこで、「曲沃はわが先祖の宗廟がある場所だ。蒲は秦に隣接し、屈は翟に隣接していて、どちらも重要な土地だ。息子がいないと心配じゃ。」といって、太子申生を曲沃に、公子重耳を蒲に、公子夷吾を屈に居らせた。献公と驪姫の子奚斉とは晉の都絳にいたので、人々は太子が廃立されるであろうことを知ったのだ」とある。○朝治……元来朝廷と民間のことだが、元曲では朝廷の意味で用いられる。「朝野」が正しい表記だが、元曲では「朝治」と書かれる例が多い。用例では、「貶夜郎」（元刊本）第二折「小童、此處無事、你自回去。如是朝治里官人每、你道我在這里（おまえ、ここは大丈夫だから、帰っておくれ。朝廷の役人には、私はここにいると言ってくれ）」、「東窗事犯」（元刊本）楔子「欲起軍去、不見聖旨到来、……不知朝治里有甚事（軍を起こして出陣しようと思うが、聖旨がやって来ない、……朝廷で何かあったのかしら）」などと見える。○呂用公……誰を指すのかは不明。呂という姓の人物としては、『左傳』に「呂甥」、『史記』に「呂省」が見えるが、いずれも「呂用公」と呼ばれた形跡はない。○東君……東宮。皇太子。「東君」というのは、『清波雜志』巻六によると、「寶元間、遣屯田員外郎劉渙奉使唃厮囉、番中不識稱朝廷、但言趙家天子及東君趙家阿舅。蓋吐蕃與唐通姻、故稱阿舅、至今不改。（宝元年間、屯田員外郎の劉渙を（吐蕃の）唃厮囉のもとへ派遣したが、吐蕃では朝廷と呼ぶことを識らず、ただ「趙家天子及び東君趙家阿舅」と言っていた。おそらく吐蕃は唐と通婚していたので、（唐の皇室を）阿舅（母方のおじ）と呼んでいたのが、今も改められていないのであろう）」と伝え、かつて唐が異民族と通婚していたころからの呼び方であるらしい。また、『宋史』巻六十六には、「紹定三年、都城市井作歌詞、末句皆曰、東君去後花無主。朝廷惡而禁之、未幾太子薨（紹定三年、都の市井の人々が歌詞を作り、末句に皆「東君の去りし後花に主人無し」といった。朝廷は憎んで禁じたが、まもなく

太子詢が薨じた）」とあり、実際に宋の国内でも使われていたことがわかる。○爲雲、愛月……本劇のみの用例で、詳細は不明。奚齊と卓子の幼名であろうか。徐本は奚齊と卓子のこととする。あるいは、本折【油葫蘆】に「二太子□□上□□。將雲月摘上青霄可無大才（二太子は……して、雲や月を取ろうとしているがそれほどの才能はない）」とあることから、「雲と為る」「月を愛す」と考えることもできるが、ここではひとまずそのままとした。○雲月臺……本劇のみの用例で詳細は不明。『武王伐紂平話』巻上「去宮内修臺座、可高三百尺、名日玩月臺、二名摘星樓（宮廷内に高さ三百尺の台座を造り、「玩月臺」、「摘星樓」と名付ける）」の「玩月臺」が、それに近いか。○太極宮……唐の宮殿名。天子が居住した。ここでは、時代が合わないが、ここでは単に天子のいる宮殿を言うのであろう。

〔訳〕〔淨（呂用公）と旦（麗姫）が一折〕〔駕（献公）が登場、開場して住〕〔二太子が奏上して住〕〔旦が讒言を奏上する〕〔太子を貶める〕〔正夫人を貶めて冷宮に入れて住〕

〔正末が介子推に扮し正装して登場　開〕私は介子推と申し、晉の朝廷で諫議大夫の職に就いております。晉の献公が君主ですが、朝廷では皇妃麗姫と国舅呂用公の讒言を信用し、東宮太子申生と重耳を霍地に追いやって平民とし、さらに皇后の斉姜を冷宮に幽閉しました。麗姫と彼女の二人の太子を信頼し、上の太子は奚斉、次の太子は卓慈、上の太子は爲雲（？）、次の太子は愛月（？）、帝に奏上して千尺雲月臺を作り、臺の上に百二十間の広さの太極宮を作り、天下の民を動員して、数日で完成させました。朝廷の宰相たちは、口をつぐんで何も言わず、あえて帝に諫言するものはおりません。こんな事では一体どうしたらよいものか。

《【仙呂】》【點絳唇】我想今日人才。各居朝代△爲臣宰。怕不都立在舜殿堯階。一个ヌ（个）將古聖風俗壞。

〔校〕○將古聖風俗壞……鄭本は「將古聖風俗敗」に作る。

〔注〕○舜殿堯階……元の呉來「寄張子長」詩に、「舜殿瞻儀鳳、堯階數曆蓂。（舜殿に儀鳳を見、堯階に歴蓂（月の満ち欠けにしたがってさやを付けたり落としたりする植物）を数う）」、「七里灘」（元刊本）第四折【離亭宴煞】に「您那里是舜殿堯階。嚴光呵則是跳出了十萬丈風波是非海。（あなたのほうは舜堯の朝廷などであるものか、この厳光はといえば十万丈の風波の立つ矛盾のはびこる海から飛び出すまでじゃ）」という用例が見える。

〔訳〕思うに当今の人材は、それぞれ朝廷で重臣になっているが、みな舜堯の宮殿に立っているのに、いずれもいにしえの聖人の風俗を壊すような奴らばかりです。

【混江龍】當日个高辛氏舉八元八凱。愼徽五典五惇哉。今日父子无義慈情分、兄弟喪恭友心壞（懐）。則爲五敎不明生酬（仇）恨、致令得四時失序降民災。今日父子无高低悅順、兄弟无上下和諧。臣宰與君王主事、君王信麗后支劃。大太子申生軟弱、小太子重耳囊揣。毒性子奚齊如蛇蝎、狠心腸卓慈似狼豺。愛的是爲雲長子、寵的是愛月嬰孩。却正是農忙耕種、百忙里官急科差。割捨了我當忠諫、取奏天裁。我這里整朝章秉象簡端居於相位中、我與你出班部上瑤階赴丹墀直望着君□□（王拜）。皆因朝中肱股、托賴着君勝□□、元首明哉。

〔校〕○八元八凱……鄭本は「八元八愷」のまま、徐・寧本は「八元八愷」に改めるが、改める必要は無いであろう。○壞……各本とも「懐」に改める。○酬……各本ともに「仇」とする。○支劃……寧本は「支畫」とする。○卓慈……徐・寧本は「卓子」に改める。○天□……鄭本は「天

階」、徐・寧本は「天裁」と補う。○君□□……各本とも「君王拜」と補う。用例として「范張鷄黍」（元刊本）第四折【堯民歌】「遙望着麒麟殿上拜君王（遙かに麒麟殿を望み君王に拜する）」がある。○君勝□□……鄭本は「□勝□□」、徐本は「君勝唐堯」と補い、寧本は「股肱良哉」と改める。

〔注〕○八元……高辛氏の八人の才子。『左傳』「文公十八年傳」に「高辛氏有才子八人。伯奮、仲堪、叔獻、季仲、伯虎、仲熊、叔豹、季貍。忠肅共懿、宣慈惠和、天下之民謂之「八元」。（高辛氏には八人の才子がおりました。伯奮、仲堪、叔獻、季仲、伯虎、仲熊、叔豹、季貍の八人で、いずれも忠実でつつしみうやまい、慈愛と恵みあり柔和な人々で、天下の人たちは「八元（善良な八人）」と呼びました）」とある。『漢書』「古今人表」には、「「季貍」は「季熊」に作る」という。○八愷……「八凱」とも。高陽氏の八人の才子。『左傳』「文公十八年傳」には先の「八元」の前に「昔高陽氏有才子八人。蒼舒、隤敳、檮戭、大臨、尨降、庭堅、仲容、叔達。齊聖廣淵、明允篤誠、天下之民謂之「八愷」（昔高陽氏に八人の才子がおりました。蒼舒、隤敳、檮戭、大臨、尨降、庭堅、仲容、叔達の八人で、いずれも徳があって思慮深く、聡明で篤厚、誠実な人柄でした。天下の人々は「八愷（温和な八人）」と呼びました）」とある。『漢書』「古今人表」には「「庭堅」は「咎繇」に作る」とする。また『北堂書鈔』巻五十九「八元八愷」にも彼らの名を載せる。○五典五惇……『尚書』「舜典」に「愼徽五典、五典克從（五常の教えを丁寧に広めさせたところ、人々はみな五常の教えに従って行動するようになった）」とあり、孔伝に「五典、五常之教。父義、母慈、兄友、弟恭、子孝。」と説明される。また「皋陶謨」には「天叙有典、勅我五典五惇哉。（天は人倫を整え、人間に普遍の性質を与えておられます）」とある。「范張鷄黍」（元刊本）第一折【混江龍】「傳五典、説三墳（五典を傳え、「三墳」を説く）。」○情分……親友間の情。友情。用例としては、宋の楊萬里「花下夜飲」詩に「豈與海棠情分薄、老夫自是怯春寒。（海棠に対して薄情なのではない、花冷えが心配だから）」、また、白話文学では『水滸傳』第十九回「呉用便説道、「頭領息怒、自是我等來的不是、倒壞了你山寨情分（呉用は言った。「おかしらお怒りをしずめてください。私が間違っておりました。あなたの仲間への情誼を傷つけてしまいました）」」がある。○五教……ここでは、前の「五典」と同じく「五常の教」を指すのであろう。『尚書』「舜典」「汝作司徒、敬敷五教、在寛（お前は司徒の官にあって、丁寧に五常の教えを敷きひろげ、広い心で治めてくれた）」とあり、孔傳にも「布五常之教（五常の教えを布く）」とする。○支劃……処置する。対処する。「薛仁貴」（元曲選本）第二折【浪里來煞】「眼睜睜的要殺壞。空教我心勞意攘怎支劃。（みすみす殺されそうになり、わが心は乱れどうしようもない）」。○囊揣……軟弱なこと。弱く無能なこと。『西廂記』（弘治本）巻五第四折【折桂令】「俺姐姐更做道軟弱囊揣、怎嫁那不値錢人樣蝦蟆（うちのお嬢さんがどんなに弱くたって、箸にも棒にもかからないろくでなしと結婚したりしないわよ）」、「黄粱夢」（古名家本）第二折【高過浪里來】「俺如今鬢髮蒼白。身體囊揣。則恁的東倒西歪（わしもいまや髪は真っ白、身体は弱り、こんなにふらついておる）」。○科差……賦役のこと。「張天師」（元曲選本）第一折「「陳太守詩云」農事已隨春雨辦、科差猶比去年稀。（農作業は春雨の季節に従って行われ、徴発の役人がやってくるのも今年は去年より少ない）」。○割捨……割舍に同じ。一生懸命。一切を顧みないで。○取奏天裁……臣下が奏上して天子が判断する。「取奏」の用例としては、『金史』巻三十六「禮九」「如左右司都事有須合取奏事、乃聽入宮（左右司の都事なども上奏しなければならないことがあれば、宮中に入ることを許す）」という用例がみえる。○朝章……もともとは朝廷の典章の意味だが、ここでは朝廷における正装のこと。朝服。宋の王禹偁『小畜集』巻二十一「滁州謝上表」に、「況臣頭有重戴、身被朝章、所守者國之禮容、即不是臣之氣勢（まして私は頭

には冠を重ねてかぶり、身には朝服を着け、国の禮義を守っており、家臣が権勢をひけらかすようなことはございません)」とあり、この例では衣服であることが明らかである。○班部……朝臣の列。『宣和遺事』前集に「言未絶、見一人出離班部、倒笏躬身、口稱萬歳萬歳（言葉が終わらぬうちに、一人のものが列から進み出て、笏を倒して身体を曲げて、「萬歳萬歳」と唱えた)」とある。○元首明哉……『尚書』「益稷」の「乃賡載歌曰、元首明哉、股肱良哉、庶事康哉。（そこで帝の歌に続け、その心を完結させて唱った。「元首が聡明であればこそ、臣下は公正に、もろもろの仕事も安定するのだ」)」に基づく。

〔訳〕そのかみ高辛氏らすぐれた帝王は八元八凱という才子を用いて、五常の教えを手厚くふみ行いました。いまや父子の間には正義を行い慈しみ思いやる心もなく、兄弟の間には敬い思いやる心は失われました。五つの教えはわからなくなってあだや恨みが生じ、四時は秩序を失い民に災いが降りかかる。今日の父子は互いに喜び従うこともなく、兄弟は上下仲良くすることもない。私めが君王のために事を司っても、君王は麗后を信頼していいようにしている。大太子申生どのはしっかりせず、小太子重耳どのは優柔不断。奚齊は蛇蝎のごとき性悪な性格で、卓慈は豺狼のような凶悪な性根。愛しいのは爲雲長子、かわいいのは愛月嬰孩。ちょうど植え付けの時期（農繁期）だというのに、役人はしきりと賦役を徴発しておる。ままよと私は君王を心からお諫めし、奏上してその裁きを求めるとしよう。私は衣冠を正して、象牙の笏を手にして、大臣の列にふだんは座しておるが、その列を離れて玉の階を駆け上り、丹墀に赴き、じかに君王に拜礼するとしよう。というのも皆朝廷にある大臣どもが、獻公は堯にもまさる名君で、まことにすぐれた君主だなどとおべっか使ってその威を笠に着ているがため。

〔做起末禮了〕〔駕云了〕〔云〕臣該萬死、□奏天顔。臣見貶正宮皇后、東宮太子、西府儲君、不知有何罪犯。〔駕云了〕〔云〕陛下信讒臣之奏、待蓋雲月臺、不可興工。〔淨旦云了〕〔駕云了〕〔云〕言者錯矣。

〔校〕○做起末禮了……徐本は「末」を削除する。○誤奏天顔……鄭本は「□奏天顔」と空格のままにし、徐本は「誤奏天顔」として「誤」は「悞」に似るとし、寧本は「慢奏天顔」とする。○言者錯矣……この前に、徐本は「陛下」、寧本は「娘娘」を補う。

〔注〕○西府儲君……儲君はふつう太子を指していう。西府は、「三奪槊」（元刊本）、『大唐秦王詞話』に、李世民を指して「西府秦王」と記している箇所があり、次男以下の男子を指すものと考えられる。したがって、ここの「西府儲君」は重耳を指しているのであろう。

〔訳〕〔立ち上がり、正末が献公に拜礼する〕〔駕がいう〕〔正末がいう〕私めは万死に値して当然でございますが、あえて陛下のもとに奏上いたします。正宮皇后、東宮太子、西府儲君の身分を剥奪されましたが、一体如何なる罪があったのでしょうか。〔駕がいう〕〔正末がいう〕陛下は讒言を好む臣下の奏上をお信じになり、雲月臺を築こうとされていますが、工事を始めてはなりませぬ。〔淨、旦がいう〕〔駕がいう〕〔正末がいう〕陛下のお言葉は誤っております。

【油葫蘆】二太子□□上□□。將雲月摘上青霄可無大才。娘娘啊便怎能够挽□（蟾）宮攀折得桂枝來。〔云〕晉朝宮室蓋不得。〔駕云了〕〔云〕陛下不可。《唱》□□（枉了）乘船用車把磚石載。枉了梁山選木將園林採。石包成千尺□（臺）。磚砌就五丈街。爲甚咱晉朝中宮殿難修蓋。□□□□□□□棟梁材。

〔校〕○二太子……鄭本は「三太子」、徐・寧本は「二太子」に作る。○□□上□□……徐本は「要尋上天梯」、寧本は「要□上□□」とする。○

摘……鄭本は「梢」に改める。○挽□（蟾）宮……各本ともに「挽蟾宮」とする。○［云］晉朝……徐本は「［帶云］晉朝」といれぜりふにする。○不可……鄭本は「不啊」とする。○□□乘船……徐・寧本は「枉了乘船」と補う。○千尺□……各本とも「千尺臺」に改める。○五丈街……原本は字の形が不鮮明。徐・寧本は「五丈階」に改める。○□□□□□□□棟梁材……徐本は「言葉の意味から補足して句を作る」として「子那深山里摧殘棟梁材」と補う。

〔注〕○挽蟾宮……「蟾宮」はヒキガエルの宮殿、つまり嫦娥が月に上ってヒキガエルになった話から月宮のこと。「月で桂枝を折る」は、科擧で成功することを指す。「僝梅香」（顧曲齋本）第四折【折桂令】「他步蟾宮將桂枝折得回來。（かれは月宮で桂枝を折り取って戻ってきますわ）」。○梁山……前の句と対句になっているとすると、ここも實際は「山を梁する」という構造であることも考えられるので、「梁」は例えば「築」のような形の似る字であったかもしれない。ただここでは字句を改めることはせず、このまま訳出することとする。○棟梁材……家屋の大黒柱。転じて国家の柱石。「三奪槊」（元刊本）第一折【油葫蘆】「陛下想當日背暗投明歸大唐。却須是眞棟梁。剗地廝廝隄防。（陛下、思えばむかし、（尉遲恭は）「暗きに背き明るきに投ず」とばかりに大唐に帰服せしものを、国家の屋台骨たるはずのものに対して、なにゆえ警戒なされます。）」という用例がある。ここでは直前の数文字が缺けているが、そのような人材がいないことを言っているのかもしれない。

〔訳〕奚斉、卓慈の二太子は……して雲や月を取ろうとしておられるが、それほどの才能はありませぬ。お后どの、どうして二人が月宮によじ登って桂枝を折り取ることができましょう。［いれぜりふ］この晉の国は宮室も造ることは出来ません。［駕がいう］［正末いう］陛下なりませぬ。［唱う］人が乗る船や車に煉瓦や石材を載せ、梁山に良木を選んで園林の木々を切るなどとはむだなこと。（土台の外側を）石で包み固めて千尺の臺を作り、煉瓦を積んで五丈街を造ろうとなさっている。なにゆえわが晉国の宮殿さえ造ることが難しいかと申し上げますと、それは棟梁の材を……。

【天下樂】今日待動土興工計利開。但用的民夫將百姓差。題起來痛傷情老臣心内駭。不爭宮殿上太極宮、不爭臺修成雲月臺。臣子怕引得禍從天上來。

〔校〕○宮殿上太極宮……徐本は「宮蓋上太極宮」に改める。

〔注〕○動土興工……「動土」「興工」いずれも建設を始めることを指す。明代の用例だが、楊一清『關中奏議』巻九「俱於本年二月十九日動土興工（ともに本年二月十九日土を動かし工を興す）」と見える。○痛傷情……「凍蘇秦」（元曲選本）第二折［詞云］不是我炒炒鬧鬧、痛傷情捶胸跌脚。（大騒ぎしているのではなく、胸を叩き地団駄を踏むほど辛い思いをしているのだ）」。○計利……利害を計算すること。元曲では他に用例がない。○禍從天上來……『朱子語類』巻七十一「如諺曰、閉門屋裏坐、禍從天上來、是也。（諺に「門を閉め部屋に坐していても、禍は天上より来たる」というようなものがこれである）」、「虎頭牌」（元曲選本）第四折［老旦云］我如今閉門家裏坐、還怕甚禍從天上來。（［老旦がいう］わたしはただいま門を閉ざして家の中に坐していても、禍が天からやってくるなんて心配はない）」。

〔訳〕今日さっそく工事を始めて利を図ろうとなさっておられる。およそ工事に使う人夫は、民草を徴発したもの。口にするだけでも痛ましく、この私は心の内でおののいております。困ったことに宮殿は太極宮を作りあげ、困ったことに臺は雲月臺を作りあげ、私は天から災いが降る結果になるのをおそれるばかりです。

［駕云了］［云］臣敢説麼。［駕云了］［云］當日紂王無道、因寵妲己、蓋摘星樓、不明殿、長夜宮、敲陽人脛腿驗髓、剖婦人腹氣驗胎、如此不仁。有諫臣三人、微子、箕子、比干。此三人者、乃是紂之庶民。爲諫不從、微子去之、箕子爲奴、比干諫而死。自古至今、百姓、諸侯、史官、皆毀紂王無道。［駕云了］

〔校〕○脛腿……徐本は「脛腿」に改める。

〔注〕○摘星楼……紂王が摘星楼を造ったという話は、正史には見えないものの、紂王の話として以前から伝わっていたようである。例えば、元の郝経「朝歌行」には「摘星樓頭醉未醒、酒池一夜蜚血驚。（摘星楼頭酔い未だ醒めず、酒池一夜して蜚血驚く）」とあり、また『武王伐紂平話』巻上には、「妲己曰、去宮内修臺座、可高三百尺、名曰玩月臺、二名摘星樓。臺上修百間閣子、臺下修千間房舎。毎年到上元十五夜、于臺上筵宴、必見姮娥也（妲己がいうには「宮廷内に高さ三百尺の台座を造り、「玩月臺」、「摘星楼」と名付けるのです。台の上には百間の楼閣を建て、台のしたには千間の房舎を造ります。毎年上元の十五夜に、台で宴会を催せば、必ずや姮娥にお会いできますわ）」とみえる。○不明殿……未詳。元曲でもここにしか見えない。○長夜宮……殷の紂王の話ではないが、晋の張華『博物志』巻七「異聞」に、「夏桀之時、爲長夜宮于深谷之中、男女雑處、十旬不出聽政。天乃大風揚沙、一夕填此宮谷（夏の桀王の時、長夜宮を深谷に造り、男女が雑居して、百日間政務をとろうとしなかった。天は大風を起こして砂を巻き上げ、一夜にしてこの長夜宮と谷を埋めてしまった）」とある。○脛腿……鄭本は「腿」を誤字ではないとして、『集韻』「腿、強脂也」を引くが、このような難しい字を使うことは考えにくい。徐本がいうように「腿」でよいであろう。○驗髓・驗胎……この話は、『史記』「殷本紀」に「紂愈淫亂不止。微子數諫不聽、乃與太師少師謀遂去。比干曰、爲人臣者、不得不以死争。廼強諫紂。紂怒曰、吾聞、聖人心有七竅。剖比干觀其心。箕子懼、乃詳狂爲奴。紂又囚之（紂王はますます淫乱がひどくなった。微子はしばしば諫めたが聞き入れられなかったので、太師や少師と謀って立ち去ってしまった。比干は「臣下たる者、死をもって争わねばならぬ」といって、強く紂王を諫めた。紂王は怒って「聖人は心臓に穴が七つあるそうだ」といって、比干の解剖してその心臓を見た。箕子は恐れて、気が変になったふりをして奴隷となった。紂王は彼を捕らえた）」とある。○微子去之～而死……この部分は、『論語』「微子」の「微子去之、箕子爲之奴、比干諫而死。（微子は立ち去り、箕子はこのために奴隷となり、比干は諫言して死んだ）」に基づく。

〔訳〕［駕がいう］［正末いう］私がどうして申し上げられましょうか。［駕がいう］［正末いう］昔紂王は無道で、妲己を寵愛するあまり、摘星楼、不明殿、長夜宮を築き、男性の脛を断ち切ってその髄の太さを確かめ、婦人の腹をさいて胎児の性別を確かめました。かくもひどいことをしたのです。微子、箕子、比干という三人の諫臣がおりました、この三人は紂王の庶民でした。諫言しても紂王に聞き入れられなかったため、微子は去り、箕子は奴隷となり、比干は諫言の結果殺されました。いにしえより今に至るまで、庶民、諸侯、史官はみな紂王の無道を非難しております。［駕がいう］

【哪吒令】百姓毎怒嫉能妬色。損臣僚重宰。力侯三市諸侯恨荒淫好色。布八方四海。史官毎罵輕賢重色。傳千年萬載。那其囲（間）正値著饑歳時、凶年代。普天下併役當差。

〔校〕○力侯三市……「侯」がやや不鮮明であり、鄭本は「力三」と音が近いところから「驪山市」とするが、徐本は本来四文字分のスペースがあるのに「驪山市」では字数があわないと指摘し、この部分は衍字と

して削除する。寧本は「力□三市」とする。ここではひとまず待校とする。○田……各本とも「間」に改める。

〔注〕○嫉能……才能ある者をねたむこと。『史記』「高祖本紀」「項羽妬賢嫉能、有功者害之、賢者疑之（項羽は優秀で能力のあるものを妬み、功績を立てた者はいためつけ、優秀な者には疑いの目を向けました）」。○妬色……美女を嫉むこと。多く正妻が妾を嫉む場合を指す。「老生兒」（元刊本）第一折「是你主家的興心兒妒色（お前という主婦の心は妾を妬むものだね）」。○輕賢重色……用例としては、元の陳天祥『四書辨疑』巻二に「蓋輕賢重色、乃古今之通患。（賢人を軽んじて色を重んじるは、古今の通弊である）」、また元曲では、「裴度還帶」（脈望館抄本）第二折【牧羊關】後白「［正末云］吾師不知、如今有等輕薄之子、重色輕賢、眞所謂井底之蛙耳、何足掛齒也。（ただいまの軽薄才子たちは、色を重んじて賢者を軽んじており、まさに井戸の蛙みたいなもので、大した者ではありません）」がある。○當差……賦役。「黑旋風」（脈望館抄本）第三折【甜水令】「俺那時節因納税當差、曾來城内（おれはそのとき税を運ぶ賦役のために、街にやってきた）」。

〔訳〕人々は（献公・麗姫が）才能ある者を憎み美女を嫉み、臣下たちを迫害したことを怒りました。……諸侯はその荒淫好色を腹立たしく思って、天下にあまねく知らしめるでしょう。史官たちは賢者を軽んじ女色を重んじたことを罵って、千年万年ののちまでも伝えようとするでしょう。その時折しも飢饉の年であったのに、天下あまねく一人に二人分の夫役を徴発したのだと。

【鵲踏枝】比及壘起基堦。立起樑材。百姓毎凍餓死的尸骸。成山握蓋。那座摘星樓、興工了數載。不曾動分毫府庫資財。

〔校〕○成山握蓋……鄭本は「積成山握、蓋」、徐本は「成山堆蓋」、寧本は「成山臥蓋」に改める。

〔注〕なし。

〔訳〕（台の）土台を作り、梁を立てるときには、人々の凍死したり餓死したりした屍が、山のように積み重なっていました。あの摘星楼は何年もかかって完成しましたが、国の金蔵のお金はわずかばかりも使われていないのです。

〔云了〕

【寄生草】百姓毎如何敢賣。官司也不敢買。［駕云了］揀人家高樑大厦渾成壞。問甚末聖壇弗（佛）堂從頭兒折（拆）。將它那皇宮内苑從新蓋。告大王恁時郎（節）龍樓鳳閣已成功。待子麼到如今雕欄玉砌今何在。

〔校〕○云了……徐・寧本は「駕云了」とする。○高樑……徐本は「高樓」に改める。○渾成壞……徐本は「渾摧壞」に改める。○弗……各本とも「佛」に改める。○折……各本とも「拆」に改める。○郎……各本とも「節」に改める。○待子麼……鄭本は「特子麼」に改める。

〔注〕○云了……役柄名が記されていないのではっきりしないが、ここでは正末が何かセリフをいうのか。徐・寧本は駕のセリフとしている。駕のセリフであれば、献公が家を買い上げなかったのかと質問をして、あとの曲がその答えとなっていると考えられる。○雕欄玉砌今何在……李煌の【虞美人】「雕欄玉砌依然在、只是朱顔改（浮き彫りした欄干、玉の石畳は昔と変わらずにあるが、ただ若々しかった私の顔だけが変わってしまった）」に基づく。

〔訳〕［駕がいう］

人々がどうして賣ろうとしましょう。役所も買おうとしません。［駕がいう］人の大きな建物を選んですべて壊し、聖壇仏堂であろうとお構いなしにはじから壊し、かの皇宮内苑を新しく（最初から）建てるので

しょう。そのときには龍樓鳳閣はすでに完成していたはずなのに、なぜ今となっては彫刻を施した欄干や玉の石畳はいまいずくにありやということになってしまったのか、お考えください。

［云了］

【六么序】毎日將生靈害。毎日把筵宴開。［《帶云》］微子、箕子、比干、［《唱》］這三人諫在金階。［《帶云》］諫不從也。［《唱》］微子便走去西伯。箕子在宮苑塵埃。把那此（比）干腹交刀刃分開。磣可ヌ（可）活把心肝摘。血濯ヌ（瀝瀝）的苦痛傷懐。驗三毛七孔眞加在。妲己早歡娛滿面。紂王早喜笑盈腮。

［校］○云了……徐・寧本は「駕云了」と補う。○此……各本とも「比」に改める。○血濯ヌ……各本とも「血瀝瀝」に改める。

［注］○生靈……生きとし生けるものを指す。梁の何遜「七召」に「譬光影於飛浮、比生靈於棲托（光影の飛浮にあるになぞらえ、生靈の棲托にあるに比す）」、『西遊記』第三五回「似我師父、師弟、連馬四個生靈、平白的弔在洞裏、我心何忍（お師匠さまと弟たち、それから馬の四人の者をいわれなく洞窟に吊しておいて、何がお哀れみくださいだ）」。○三毛七孔……『史記』「扁鵲倉公列傳」の正義に「心重十二兩、中有七孔、三毛、盛精汁三合、主藏神（心臓は重さ十二両、中に七つの穴と三本の毛があり、精汁三合を盛んにして、藏神をつかさどる）」とある。○喜笑盈腮……喜びで笑みを満面に浮かべるときの元曲での決まり文句。「鐵拐李」（元刊本）第四折【鮑老兒】「不由我喜笑盈腮（思わず満面に笑みがこぼれる）」。

［訳］［駕がいう］

毎日生きとし生けるものを殺し、毎日宴会を開く。［いれぜりふ］微子、箕子、比干、［うたう］この三人は金の階にて諫言し、［いれぜりふ］諫言すれども従わず、［うたう］微子はすぐに西伯（姫昌）のもとへ逃げ去り、箕子は宮廷の塵埃の中に置かれ（髪を剪られ奴隷にされた）、あの比干の腹を刀で切り開き、無惨にもむごくも心臓と肝臓を取り出し、血は滴り苦しみ憐れなものでした。賢人にあるという肝臓の三本の毛と心臓の七つの穴をしらべ、あることを確認するや、妲己は喜びを満面に浮かべ、紂王は顔中で笑いました。

［駕云了］

【么】爲那嬌態。有些顏色。選入宮來。把那蠆盆深埋。銅柱牢栽（栽）。酒池鐫開。肉林安排。損害人材。食啖嬰孩。引的四海兵來。戈戟無該。想着紂王興衰。我王栽劃。則爲摘星樓把山河拜（敗）壞。陛下修臺（甚）麼望月臺。［駕云了］戊午日兵來。甲子日成史（災）。皆因那姜太公妙策奇材。臨時間血浸朝歌壞。把座摘星樓變做塵埃。武王伐紂工（功）勞大。一來是神天佑護、一來是天地栽（栽）排。

［校］○牢栽……各本とも「牢栽」に改める。○拜壞……各本とも「敗壞」に改める。○修臺麼……徐・寧本は「修甚麼」に改める。○望月臺……徐本は「雲月臺」かと疑う。○成史……各本とも「成災」に改める。○奇材……徐・寧本は「奇才」に改める。○工勞……各本とも「功勞」に改める。○栽排……徐・寧本は「栽排」に改める。

［注］○蠆盆……殷の紂王が行った酷刑の一つ。毒蛇や毒虫を穴に置いておき、そこへ罪人を放り込むというもの。『武王伐紂平話』巻中には、「臣啓陛下、臣聞大王亦信妲己讒言、置酒池肉林、蠆盆、炮烙之刑、苦害他人（陛下に申し上げます。聞くところでは大王さまは妲己の讒言を信じ、酒池肉林、蠆盆、炮烙の刑を設置し、はなはだ人々を迫害しております）」とある。○栽劃……本来は濡れ衣を着せるという意味だが、ここでは酷いことをする、苦しめるぐらいの意味か。「金鳳釵」（脈望館抄本）

第三折「你將我惡搶白、死栽劃、將休書疾快寫將來（あんたがあたしをひどく責め立て、苦しめるなら、去り状をさっさと書いてちょうだい）」。○戊午日～甲子日～血浸朝歌……「戊午」「甲子」は『尚書』「泰誓」にすでに見える日付であり、白話文学では、『武王伐紂平話』巻下に「太公曰、戊午日兵臨孟津、甲子日血浸朝歌（太公が言うには「戊午の日軍勢が孟津のほとりに着き、甲子の日血に浸されて朝歌は滅びました」）」とあり、「周公摂政」（元刊本）第一折【混江龍】にも『平話』とほぼ同じ表現が見える。○栽排……取りはからう。計画する。「任風子」（元刊本）第三折【粉蝶兒】「先交我栽排下久長活計（まず私にずっと食べていけるたつきの種を用意させているのだ）」。

〔訳〕〔駕がいう〕

あだっぽい姿と少しばかり容色がすぐれていたために、選ばれて後宮に入りました。毒虫の入った壺を深く埋め、銅の柱をしっかりと立て、酒の池を開き、肉林を用意しました。才能ある人を損ない、子供を食べました。そのため四海の兵を引きよせて、あるまじき兵火を起こしました。紂王の興亡に思いを致すと、わが国王さまお考えください。ただ摘星楼のために天下を滅ぼした前例を。陛下、望月臺を築いている場合ではありません。〔駕がいう〕戊午の日に兵が押し寄せ、甲子の日に災いがおこりました。これみなかの姜太公の奇才妙策によるものです。その時には血にひたされて朝歌は滅び、摘星楼は塵芥に変じてしまいました。武王が紂王を伐った功労が大きかったのには、天の神のご加護があったことと、天地の巡り合わせがよかったこと。

〔淨旦云了〕〔駕云了〕〔《正末》謝駕云〕萬歲、ヌヌ（萬歲）。〔出朝科〕〔云〕聖人道、篤信好學、守死善道、危邦不入、亂邦不居。天下有道則見、無道則隱。今日退朝、是吾全身之樂哉。

〔校〕○謝駕云……徐本は前に「正末」を補い、正末のせりふとする。

〔注〕○篤信好学……『論語』「泰伯」「子曰、篤信好學、守死善道。危邦不入、亂邦不居。天下有道則見、無道則隱。邦有道、貧且賤焉、恥也。邦無道、富且貴焉、恥也（先生はいわれた。「学問の効用を確信してそれを好み、命がけで道徳の向上に努力する。危険な国には立ち入らない、無秩序な国に入ったら立ち去る、天下に道徳があるときは表面に現れ、道徳がないときは隠れて表面に立たない。国に道徳があれば、貧しく賤しい身分にいるのは、恥である。国に道徳がないのに、富貴であるのは、恥である」）」に基づく。

〔訳〕〔淨、旦がいう〕〔駕がいう〕〔正末が駕に謝していう〕万歲、万歲。〔朝廷を出るしぐさ〕〔いう〕聖人が言うには、「学問の効用を確信してそれを好み、命がけで道徳の向上に努力する。危険な国には立ち入らない、無秩序な国に入ったら立ち去る、天下に道徳があるときは表面に現れ、道徳がないときは隠れて表面に立たない。」と。いま朝廷を退出して、これが私が身を全うする楽しみだ。

【尾（賺煞）】跳出那興廢利名場、做一个用□□（舍行）藏客。孔子道危行言遜免害。不得中興（行）而與之、必也狂簡（狷）進退乎哉。〔淨旦云了〕《〔唱〕》見如今您晉朝中禍已成胎。少不得惹起場干戈横禍災。〔云了〕《〔唱〕》我想這千尺月臺。恁時節撇在九霄雲外。〔淨云了〕《〔唱〕》我道來。去了這晉朝臣、您可索隄備着楚兵來。〔下〕〔駕一行下了〕

〔校〕○【尾】……各本とも【賺煞】に改める。○用□□藏……各本とも「用舍行藏」を補う。○危行言遜免害……徐本は「危行言孫免害」、寧本は「危行言遜遠害」に改める。○中興……各本とも「中行」に改める。○狂簡進退乎哉……徐本は「狂狷乎哉」、寧本は「狂狷進退乎哉」に改める。○隄備……徐本は「堤備」に改める。

〔注〕○用舍行藏……『論語』「述而」「子謂顔淵曰、用之則行、舍之則藏、唯我與爾有是夫（先生が顔淵にいわれた。世の中が自分を認めて任用すれば行動する、しかし世の中から見捨てられればひそみかくれる。この考えは私とおまえだけが持っている）」に基づく。○危行言遜……『論語』「憲問」「子曰、邦有道、危言危行、邦無道、危行言孫（先生がいわれた。国家に道徳があるときは、言葉を高くし、行いを高くする。国家に道徳がないときは、行いを高くし言葉は控えめにする）」に基づく。「孫」では意味がわかりにくいため、当時「遜」の字で広まっていたものかと思われるので、文字の訂正は行わず、このままにしておく。○狂狷……『論語』「子路」に「子曰、不得中行而與之、必也狂狷乎。狂者進取、狷者有所不爲也（先生がいわれた。中庸を得た行動をする人物を見つけ出して、それとともに行動することが出来れば理想的であるが、それが出来なければ「狂なる者」と「狷なる者」この二種の人物と行動をともにしよう。「狂なる者」とは積極的に行動する人物であり、「狷なる者」とは節を守って行動しない人物である）」に基づく。直前の句に「不得中行而與之」とあることから考えて、「狂狷」に改めるほうがよいだろう。なお、原本の「狂簡」は、同じく『論語』「公冶長」の「子在陳曰、歸與、歸與。吾黨之小子狂簡、斐然成章、不知所以裁之（先生が陳国に在っていわれた。帰りたい、帰りたい。わがむらの若者は志が大きくやることがやや粗忽で、文才にすぐれてはいるが、どう決まりをつけてよいかが分からないでいる）」に基づく。○禍已成胎……禍が兆す。類似の表現として、「福已成胎」ある。「焚兒救母」（元刊本）第三折【耍孩児】「姓王的禍因悪積、姓張的禍（福）已成胎（王姓の者は禍が積もりに積もり、張姓の者は福が兆している）（各本ともに「禍」を「福」に改める）」。○少不得……避けられない。「拜月亭」（元刊本）第四折【駐馬聽】「少不的向我繡幃邊。説的些磣可可落得的冤魂現（わがとばりで、あわれな怨みを抱いた魂が現れるという）。」○撇在九霄雲外……「看錢奴」（元刊本）第二折【滾繡毬】「今日把俺子父情都撇在九霄雲外（今日我ら父子の情をすべて九霄の雲の外へ捨て去った）」、「東窗事犯」（元刊本）第四折【柳葉兒】「今日都撇在九霄□（雲）外。不能勾位三公日轉千階（今日は魂はすべて九霄の雲の外へ飛び散ってしまい。三公の位に一日で千階も飛び越すということはできなくなった）」など。○隄備……備える。防備する。宋の李綱「與秦相公書」に「竊意朝廷有江北之警、預爲隄備、不得已而如此（密かに朝廷には江北の警戒をしようという意図があり、事前に防備をしていて、やむを得ずこうなっているのです）」という用例がある。白話文学では、『董西廂』巻八【看花廻】「至普救、諸多僧行難隄備（普救寺に寄せ来れば、あまたの僧ら備える術もなく）」、「霍光鬼諫」（元刊本）第四折【掛玉鈎】「陛下隄備着鐵甲將軍夜過關（陛下、甲冑を身につけた将軍が夜函谷関を通り過ぎるのを防いで下さい）」がある。

〔訳〕利益と名声とが興廃を繰り返すところから飛び出して、任用される時には行い、任用されない時には隠れることにしよう。孔子が言うには「（国家に道徳がなければ）行いを高くし言葉は控えめにする」「中庸を得た行動をする人物を見つけ出して、それとともに行動することが出来れば理想的であるが、それが出来なければ、「狂なる者」と「狷なる者」この二種の人物と行動をともにしよう。」〔淨、旦いう〕いまやおぬしら晉朝には禍が芽を出し、いくさやわざわいが引き起こされるのは避けられぬぞ。〔淨がいう〕この千尺の月臺はいつ九霄の雲の外へ棄てられ、〔淨がいう〕〔唱う〕思うにこの晉の家臣が去って、楚兵がやってくるのに備えるがよい。〔下〕〔駕一行退場〕

《第二折》

〔淨旦説計了〕〔駕上云〕〔奏住〕〔駕云了〕〔申生重耳呉（哭）住〕〔駕一行上〕〔旦與申生祭食〕〔藥死神傲（獒）了〕〔重耳走下〕〔回奏了〕〔駕云了〕〔《正末》扮淹（閹）官托砌末上〕〔云〕自家六官（宮）大使王安。奉

官里○○（聖旨）、皇后○○（懿旨）、賣三般朝典、將東宮太子賜死。想人生寃枉、何處伸訴。

〔校〕○淨旦説計了……徐本は第一折の末尾に置くが、鄭・寧本では第二折の始めに置く。○呉……各本とも「哭」に改める。○神傲……各本とも「神獒」に改める。○淹官……各本とも「閹官」に改める。○自家……寧本は「咱家」に改める。○六官……各本とも「六宮」に改める。○官里○○、皇后○○……各本とも「官里聖旨、皇后懿旨」とする。

〔注〕○旦與申生祭食……本折のもとになっている話は、『左伝』「僖公四年傳」の次の記述である。「初晉獻公欲以驪姬為夫人、卜之不吉、筮之吉。公曰、從筮。卜人曰、筮短、龜長。不如從長。且其繇曰、專之渝、攘公之羭。一薰一蕕、十年尚猶有臭。必不可。弗聽、立之。生奚齊、其娣生卓子。及將立奚齊、既與中大夫成謀。姬謂大子曰、君夢齊姜、必速祭之。大子祭于曲沃、歸胙于公。公田。姬寘諸宮。六日、公至、毒而獻之。公祭之地、地墳、與犬、犬斃、與小臣、小臣亦斃。姬泣曰、賊由大子。大子奔新城。公殺其傅杜原款。或謂大子、子辭君、必辯焉。大子曰君非姬氏、居不安、食不飽。我辭姬必有罪。君老矣。吾又不樂。曰、子其行乎。大子曰、君實不察其罪、被此名也以出、人誰納我。十二月、戊申、縊于新城。姬遂譖二公子曰、皆知之。重耳奔蒲、夷吾奔屈。（はじめ晉の献公は驪姬を夫人にしようと思い、そのことを卜させると不吉と出て、次に筮をさせると吉と出た。公は「筮に従おう」と言ったが、卜人が言うには「筮は軽く、卜は重いものです。重いほうにしたがうにこしたことはありません」。その判じた言葉に「驪姬を后にすれば形勢が一変し、公の牡羊を盗むようなことになる。香草も臭い草も十年経ってもなお臭うといいます。けっしてなりません。」献公は聞き入れず、驪姬を后に立てた。驪姬は奚斉を生み、その妹は卓子を生んだ。奚斉を跡継ぎに立てようと、中大夫と共謀した。驪姬は太子申生に言った。「わが君は斉姜（申生の母）を夢にご覧になった。早く斉姜の霊を祭りなさい」そこで太子は曲沃において斉姜を祭り、供えた肉を公に贈った。公は狩りに出かけていて留守だったので、驪姬がその肉を宮中に入れておいた。六日後、公が戻ってきたので、毒を入れた肉を献じた。公がこれを地の神に供えたところ地がむくむくと動き、犬に与えると犬が死んだ。宦官に与えるとやはり死んでしまった。驪姬は泣いて言った。「悪者が太子についたのです。」太子はこのことを聞いて新城（曲沃）に逃げた。公はその守り役杜原款を殺した。ある人が太子に言った。「あなたが弁解をなされば、公はきっとおわかりになりましょうものを。」太子は「わが父君は驪姬でなければ夜も日も明けない有様だ。私が弁解したならば驪姬が罰せられる。わが君はもう老いておられる。私も面白くない。」「それならばあなたはいずれかへお立ち去りなさい。」太子「わが君は実際にこの罪のことを（罪にあらざることを）見抜いて下さらない。かりにこの罪名を被ったなりで、国外へ出ても、誰がうけいれてくれようぞ。」十二月、戊申の日、太子申生は新城で首をくくって死んだ。驪姬は二公子をも讒言して「あの人たちも皆この陰謀に関係しています。」といった。重耳は蒲へ逃げ、夷吾は屈に逃げた）」。なお『史記』「晉世家」には、驪姬を后にするか占う記述はない。○神獒……猛犬。「趙氏孤兒」（元刊本）第三折【川撥棹】「你當日養神獒。把忠臣良將咬（お前はあのとき神獒を養い、忠臣、良将にかみつかせたのだ）」。○閹官……宦官。晉・袁宏『後漢紀』「順帝紀下」「初、上之立、閹官之力也（はじめ、お上が位に即いたのは、宦官の力だ）」。○砌末……実演での小道具、また書き割りなどを指す。「錯立身」戯文第四出「我收拾砌末恰來（私は道具を片づけてから行きます）」。○六宮大使……「六宮」は『後漢書』「后妃傳上」に「六宮稱號唯皇后貴人（六宮の称号はただ皇后、貴人だけである）」とあり、鄭玄が注して「周禮曰、皇后正寢一、燕寢五、是爲六宮也。夫人已下分居焉（『周礼』に「皇后は正寢が一、燕寢が五、これが六宮である。夫人

がその下に分かれて居住する）」というように後宮のことである。白居易「長恨歌」「回眸一笑百媚生、六宮粉黛無顔色（眸を回して一笑すれば百媚生じ、六宮の粉黛顔色無し）」でも有名。「六宮大使」は、元曲での用例はここのみ。白話文学では、『前漢書平話』巻下「太皇使六宮大使張石慶（太皇は六宮大使張石慶を遣わせて）」や、『警世通言』「崔衙内白鶴招妖」に「玄宗駕即時起、使六宮大使高力士高珪送太眞歸第、使其省過（玄宗の乗り物はすぐに出発し、六宮大使高力士高珪に楊太真を送らせ邸宅に帰し、過ちを反省させた）」という用例をみると、いずれも宦官を指している。○朝典……朝廷の典章が原義。朝廷の儀礼に関わる物、朝廷の法律を執り行うときに関わる物などを指す。ここでは自死を迫る三種の道具と考えられる。「趙氏孤兒」（元曲選本）楔子では、「小官奉主公的命、將三般朝典是弓絃、藥酒、短刀、賜與駙馬趙朔、隨他服那一般朝典、取速而亡（それがしは主公の命を奉り、三種の道具弓絃、藥酒、短刀を持ち、駙馬趙朔に賜り、彼に道具のうち一つを受け取らせて、すぐに死なせます）」とある。また、『七國春秋平話』巻中には「今遣騎劫代汝回朝、別議官賞。如違詔命、即賜朝典（いま騎劫を汝に代わらせ、帰朝を命じる。特別に官職と褒賞を与える。もし命令に背くことあらば、即刻朝典を賜うこととする）」とある。

〔訳〕〔淨（呂用公）と旦（麗姫）が（太子を害する）陰謀を語る〕〔駕が登場していう〕〔（淨と旦が）奏上する〕〔駕がいう〕〔申生と重耳が哭す〕〔駕の一行が登場〕〔旦が申生の祭食を与え、犬が毒殺される〕〔重耳が逃げて退場〕〔戻って奏上する〕〔正末が宦官に扮して小道具を持って登場〕〔せりふ〕私は六宮大使の王安です。皇帝陛下のご命令と皇后殿下のご命令を奉り、三種の法具で、東宮殿下に死を賜ることとなった。人の世の濡れ衣はどこへ訴えればよいのであろう。

《南呂》【一枝花】到今（令）得申生遭罪囚。逼臨得重耳私奔走。雖然是麗皇后生嫉沍（妬）、哎你个晉天子也合問緣（縁）由。您肯分解个恩仇。賜朝典它甘心受。料東宮一命休。子是刎脛（頸）交傷身、難（離）不了這短劍白練藥酒。

〔校〕○今……各本とも「令」に改める。○沍……各本とも「妬」に改める。○緑……各本とも「縁」に改める。○脛……各本とも「頸」に改める。○傷身……徐本は「害命傷身」と補う。寧本はここに二字の空格があるとする。○難……各本とも「離」に改める。

〔注〕○刎頸交……使役の「交」と「刎頸交（刎頸の交わり）」とをかけているか。

〔訳〕ついに申生は罪人の憂き目に遭い、重耳は出奔を迫られました。これは麗皇后の嫉妬深さのせいとはいえ、ああ晉の天子たるあなたさまも事情をたずねるべきであったでしょう。あなたがたは恨みを解くべきところ、自死を迫る道具を送ったので彼は甘んじて受けられましょう。皇太子の命はこれまで。ただ首はねられて身を損ねるか、この短剣としろぎぬ、薬酒から逃れることは出来ぬ。

【梁州】前家兒功番成罪壘（累）、後堯婆恩變爲仇。〔《帶云》〕從古至今、〔《唱》〕前家後繼從來有。似這麗后定計、國舅舖謀。暗存着燕侶鶯儔。可持（待）請佃它鳳閣龍樓。送的个前家兒惹罪遭殃、般（搬）得个親夫主出乖弄醜。都是後堯婆私事公仇。國舊（舅）。太后。君王行兩三遍題名兒奏。着自（咱）家自等候。交武士金瓜列在我這腦背後。我如何不敢承頭。

〔校〕○【梁州】……各本とも【梁州第七】と補う。○番……徐・寧本は「翻」に改める。○罪壘……鄭本は「壘」を衍字と疑う。徐本は衍字として削除。寧本は脈望館抄本「魏徵改詔風雲會」を引き、「罪累」とす

る。○可持……各本とも「待」に改める。○般……各本とも「搬」に改める。○國舊……各本とも「國舅」に改める。○自家……徐・寧本は「咱家」に改める。○不敢……徐・寧本は「敢不」に改める。

〔注〕○前家……前妻。「酷寒亭」（古名家本）第三折【賀新郎】前の白「這里有個鄭孔目、娶了一箇小婦、折倒他前家一雙兒女（ここの鄭孔目が、妾をめとり、前妻の息子娘をいじめる）」。○後堯婆……継母。後妻。「酷寒亭」（古名家本）第三折【賀新郎】「前家兒招了箇後堯婆（前妻の子が後添いを招く）」。○燕侶鶯儔……男女の愛情が燕や鶯のつがいのように深いこと。「燕儔鶯侶」とも。『西廂記』（弘治本）巻三第三折【攪箏琶】「只爲這燕侶鶯儔（ただ燕や鶯のつがいのようになり）」。○請佃……受け入れる。受け取る。「任風子」（元刊本）第二折【二煞】「撇下了砧刀活計、待請佃你个藥葫蘆（肉屋家業をうち捨てて、あなたの仙薬を受け取ろう）」。○龍樓鳳閣……帝王の宮殿、楼閣のことだが、ここでは第一折に出て来た愛月楼を指すのであろう。○親夫主……婚姻関係にある夫。「親夫」とも。「神奴兒」（元曲選本）第四折【鴈兒落】「他將親夫主纔埋殯（彼女は夫を亡くしたばかり）」。○搬……そそのかす。挑発する。「殺狗勸夫」（脈望館抄本）第四折【么篇】後の旦児のせりふ「每日這兩个幫閒鑽懶、搬的俺弟兄不和（毎日この二人はおべっかつかい、そそのかしてわが弟の仲を不和にした）。」○題名……名指しする。「酷寒亭」（古名家本）第三折【賀新郎】「題名兒罵了孜孜的唾（子を名指ししてぺっぺっとつばを吐いて罵る）」。○金瓜……近衛兵の儀仗。棒の先に金色の瓜形をしたものが付く。また、それを持った近衛兵を指すこともある。『宣和遺事』前集「使此妖法謊朕、交金瓜簇下斬訖報來（この和尚は怪しい術を用いて朕を騙しおった、近衛兵に斬らせて報告させよ）」。○承頭……引き受ける。「范張雞黍」（元刊本）第三折【金菊香】「這幾件我承頭。你身後事不須憂（これらのことは私が引き受けた。亡くなった後のことは心配しないでくれ）」。

〔訳〕前妻の子の功績は罪となり、後妻は恩をあだとなした。［いれぜりふ］昔から今に至るまで、［唱う］前妻の子と後添いの子というものはよくあるが、この麗后が計略を立て、国舅がはかりごとをなすにまさることはないであろう。背後には色仕掛け、それで宮殿をわがものにしようとしている。そのため前妻の子は罪に陥れられ災いに遭い、夫は恥をかかされた。すべて後妻が私的な怨みを公に晴らそうと、国舅と太后は、君王の前で名指しして奏上し、私を待たせておく。近衛兵の金の棒が後ろに控えていては、どうして承諾せずにいられよう。

［天臣云了］［《正末》聽了］［太子云了］

【牧羊關】將太子待故（放）來如何放、交太子待走來如何走。［《帶云》］臣若壞了太子呵。［《唱》］交這潑宮奴萬載名留。若不交太子短劍下身亡、微臣便索金瓜下命休。太子今日青天上遭罪死、若到黃泉下不可結寃仇。［太子云了］［《唱》］那壁是○○（聖旨）難推怨、微臣這壁官差不自由。

〔校〕○故……各本とも「放」に改める。○○○……各本とも「聖旨」に改める。

〔注〕○天臣云了……太子に早く自殺させるように促すのであろう。○宮奴……宮廷内に仕える宦官。『七國春秋平話』巻上「令宮奴宣孫子入宮（鄒皇后は宦官に命じて孫子を宮殿に入らせた）」。

〔訳〕［天臣がいう］［正末が聞く］［太子がいう］

太子を釈放しようにもどう釈放できましょう、太子を逃がそうにもどう逃がせましょう。

［いれぜりふ］私がもしも太子をあやめれば、［唱う］このやくたいもない宦官めは千載の後まで汚名を残すことになりましょう。さりとて太子を短剣で自殺させねば、それがしが金の棒で命を奪われます。太子さま、いま青天のもとあたら罪に遭って死んでも、あの世で恨みに思ってはな

りませぬ。［太子がいう］［唱う］あちらは帝の詔なれば怨みを及ぼすは難しい、それがしはお役目なれば是非も無し。

［做待着尋思了、云］自至宮中、誰會害人性命。

【四塊玉】我從來是个奉善人、那里有殺人的手。竹節也似聖○（旨）催怎敢遲留。［《帶云》］至如東宮合死呵。［《唱》］也不合交這明晃ヌ（晃）短劍下亡、［《覷》砌末云］若要个完全的尸首。［《唱》］子合交這長挽ヌ（挽）白練休。［覷砌末云］太子呵。［《唱》］你能可眼争（睜）ヌ（睜）服藥酒。［使臣上云］［《正末》云］臣不知太子有何罪犯。官里與皇后有這般寃恨。［説關子了］［《正末》听住］

［校］○聖○……各本とも「聖旨」に改める。○敢遲留……鄭本は校記に「この曲は〝敢遲留〟の後、七字句が一つ少ない」と述べる。○砌末……各本とも前に「覷」を補う。○争ヌ……各本とも「睜睜」に改める。○听住……徐本は前に「正末」を補う。

［注］○竹節也似……竹の節のように続いて。「東窗事犯」（元刊本）楔子【端正好】「却怎竹節也似差天使（なにゆえ竹の節のように続いて使者を遣わされるのか）」。○至如……たとえ。もし。「追韓信」（元刊本）第一折【天下樂】「空將文業攻、武藝學。至如學將來有甚好（あだに学問をおさめ、武芸を学んだ。学んでも何の良いことがあろう）」。○關子……事情。あらまし。「拜月亭」（元刊本）第二折【牧羊關】前のト書き「做説關子了（事情を話すしぐさをしてから）」など。

［訳］［しばし思案あっていう］ご自分で宮中に行かれれば、誰がお命をあやめましょうや。

私はずっと善行を奉じてまいった者、人殺しなどとてもできませぬが、竹の節の如く続けて詔の催促があればどうして遅延できましょうや。［いれぜりふ］もし太子は死なねばならぬとしても、［唱う］このキラキラ光る短剣で死ぬべきではない。［道具（白絹）を見ていう］五体そろった屍骸を残そうといっても、この長い白絹で縊らせるべきだろうか。［道具（毒酒）を見ていう］太子さま、［唱う］あなたがみすみす毒酒を飲むことができましょうか。［使者が登場、言う］［正末が言う］それがし太子に如何なる罪があって、帝とお后がかような恨みを持っておいでかわかりません。［太子がわけを話す］［正末が聞いて住］

【罵玉郎】听太子從頭兒説開無虛謬。元來是爭社稷結寃仇。子是這三人定的計策臣也都參透。是君王傳的聖旨、麗后定的見識、是賊子施的機彀。［淨云了］［《正末》慌聽了］

［校］○是君王傳的聖旨……徐本・寧本は「是」を削除。○慌聽了……徐本は前に「正末」を補う。

［注］○參透……見抜く。見破る。悟る。「任風子」（元刊本）第三折「若不是我參透玄機。則這利名場、風波海、虛担（耽）一世。（もし私が天意を見抜くのでなければ、この名利を追う場、諍いの絶えぬところ、一生をむなしく過ごすだけ）」。○機彀……はかりごと。計略。「救風塵」（古名家本）第二折【逍遙樂】「正中那男兒機彀（まさにあの男の思うつぼ）」。

［訳］太子が一部始終を話すを聴けば嘘偽りはなし。なんとまあ帝位を争って結んだ仇、ただこの三人が仕組んだはかりごと、それがしはすべてお見通し。これは帝の詔なれど、麗后が悪知恵、悪党めが企んだ罠。［淨がいう］［正末があわててきく］

【感皇恩】呀諕的我魂魄悠ヌ（悠）。不隄防有人隨後。每（嗨）太子命難逃、微臣也身難趦（躲）、那賊漢怒難收。［太子云了］都是賊子奏。ヌ（奏）得您繼母焦、ヌ（焦）得您父王愁。［太子云了］

〔校〕○毎……各本とも「晦」に改める。○趂……各本とも「躱」に改める。○第八句「ヌ」……鄭・寧本が前の字に従って「焦」とするのに対し、徐本は「奏」とする。

〔注〕○この曲牌は十句からなるのが定格である。第五句の後にあるべき四字句二句が足りない。○魂魄悠悠……ここではびっくりして気の遠くなるさま。用例としては「單刀會」（元刊本）第二折第二支【滾繡毬】「我却甚一盞能消萬古愁。説起來魂、（魄）悠、（わたしは「一盞能く萬古の愁いを消す」なぞとんでもない、口にしただけで魂ははるか彼方にすっとんでしまいますわ）」がある。また、「范張鷄黍」第三折【高過浪來里】「你覷四野田疇。三尺荒丘。魂魄悠悠。誰問誰揪。（四方に広がる畑、三尺の荒れ果てた丘、魂は寄る辺なく、だれも気に掛けぬ）」では、魂が寄る辺ないさまの形容として用いられている。○不隄防……突然。思いがけず。「三奪槊」第一折【賞花時】「初間那唐元帥怎想。腦背後不低（隄）防。（はじめは唐元帥さまは背後から突然危険が迫るなどとは思っても見られませんでした）」ここでも、背後から突然危険が迫るという意味であろう。曾瑞卿【鬬鵪鶉】套「風情」【尾】「貪顧戀眼前甜、不堤防背後閃。（目の前の甘いえさに執着しているうちに、突然後ろから捨てられてしまった）」

〔訳〕やや、びっくり仰天魂も飛び失せた。何と後を付けてきた者がおろうとは。ああ、太子様はもはや命逃れることもなりかね、それがしは身を隠すことになりかね、あの悪党めは怒り鎮めること為りかねる有様。

［太子いう］これもみなあの悪党めが上奏して、上奏を聞いた継母上がじりじりされ、じりじりされるのを見て父君が心配なされたということ。

［太子いう］

【採茶歌】你道他下場頭。怎干休。太子呵子除你一心分破帝王憂。右（古）往今來雖是有。寃二（寃）相報何時休。

〔校〕○右往今来……各本とも「古往今来」に改める（ただし校記を付すのは寧本のみ）。○何時休……徐本は「幾時休」に改める。

〔注〕○下場頭……なれの果て。鍾嗣成【清江引】「風情」曲「直恁鐵心腸、不管人憔悴、下場頭送了我都是你。（そんなつれない心で、人をやつれさせて、結局はお前のせいであの世行き）」。○一心分破帝王憂……成語。『七國春秋平話』巻上「兩手補完天地缺、一心分破帝王憂（両手で天地の欠けたところを直そうとし、ひたすら帝王の愁いをはらそうとする）」、「楚昭王」（元刊本）第二折【聖藥王】「片時間血濺了鳳凰樓。休想分破帝王憂（あっというまに鳳凰楼に血をそそぐこととなり、帝王の憂いを分かちになうなどとおもうなかれ）」。○怎干休……ただではすまない。『西廂記』（弘治本）巻四第二折【小桃紅】「既然泄漏怎干休。是我相投首。（ことが漏れてしまった以上ただではすまない。私が自首します）」。○古往今来……潘岳「西征賦」「古往今来、邈矣悠哉。（太古から今に至るまで、なんと長く續いていることだ）」、杜牧「九日齊山登高」詩には「古往今来只如此、牛山何必獨霑衣（昔からこうなのだ、牛山でただ涙で衣を濡らすだけだろうか）」、「追韓信」（元刊本）第三折白「想古往今來。多少功臣名將。誰不出於貧寒碌碌之中（思えば太古から今まで、多くの功臣、名将が、貧しい境遇から身を起こしたのだ）」。○寃二相報何時休……復讐がくり返されて果てしもない。宋・王明清『投轄録』「法悟曰、我若報寃、寃寃相報、無有了期。（法悟が言うには、私がもし復讐を果たせば、さらに復讐が繰り返され果てしがないでしょう）」とあり、また『輟耕録』巻十二「張道人」「因念寃寃相報、無有了時、遂棄火歸（復讐を繰り返せば、果てしがない、そのまま火を捨てて帰ってきたのだ）」、元曲では「趙氏孤児」（元刊本）第一折【寄生草】「朝朝挾恨幾時休、寃寃相報何時盡（毎日恨みを抱いていつ止むことがあるだろうか、復讐が繰り返されていつ終わるだろうか）」。また『宦門子弟錯立身』【排歌】には芝居の題を列挙する中に「寃寃相報趙氏孤児」と見える（元刊

本・『録鬼簿』は「冤報冤趙氏孤児」）。

〔訳〕やつのなれの果てを見よ、ただではすまさぬとおっしゃいますが、太子様、あなたはひたすら殿様のために尽くされるしかありませぬ。（親子で恨みあうことは）古来数あることなれど、仇を報いあって果てしもないことになりましょうぞ。

〔使臣上云了〕〔《正末》云〕天臣言者差矣。

【牧羊關】他父親牽腸肚、咱兩个哥廢（費）口。它子父毎更歹殺呵痛關着骨肉。待將它摘膽剜心、怎做的不傷懷袖。觸突着皇后合依平論、兒（冒）突着天子合問縁由。傷毒着宮婢非爲罪、藥煞神徹（獒）直甚狗。

〔校〕○咱兩个哥廢口……鄭本は「咱兩個×廢口」（「廢口」については待考とする）、徐本は「咱兩个可費口」、寧本は「咱兩个何費口」とする。○兒突……鄭本は「觸突」、徐本は「冒突」、寧本は「冒瀆」とする。○神徹……各本とも「神獒」とする。

〔注〕○使臣……申生に死を賜る使者か。○牽腸肚……人を思って悲しむさま。『西廂記』（弘治本）巻四第四折【折桂令】に「似這般割肚牽腸、到不如義斷恩絶（こんなにかなしい思いをするなら、いっそすっぱり義を断ち恩を絶ったほうがよい）」というように、「牽腸割肚」という形で用いられることが多く、『三國志演義』『金瓶梅』などにも見られるが、この形での例は陳克明の【粉蝶兒】「怨別」套【紅繡鞋】に「愁寂寞縈牽腸肚」に少し違う形で見えるほかには、杜仁傑【耍孩兒】「喩情」套の【哨遍】に「王屠倒臓牽腸肚」と見えるのは、比喩とはいえ文字通りにははらわたを抜き出すということであろう。○哥廢口……「廢口」は「費口」の誤りと見るべきであろう。「哥」については、徐本は「可」、寧本は「何」とする。字形は「可」に非常に近く、徐本の見解が妥当か。○摘膽剜心……胆を取り出し心臓をえぐる。「任風子」（元刊本）第一折【尾】「他若是駕雲輕（軒）。折末平地昇仙。我將這摘膽剜心手段顯（かれがもし仙人が乗る雲車に乗り、たとえ突然仙人になっても、私は胆を取り出し心臓をえぐって腕前を見せつけてやろう）」。○懷袖……「古詩十九首」第九首に「馨香盈懷袖、路遠莫致之（芳しい香が袖やふところにみちあふれているが、道が遠いので君のもとまで届けるすべがない）」、同第十七首に「置書懷袖中、三歳字不滅（この手紙をふところにしまっていて、三年後の今みても字が消えていない）」と見えるように、古くからふところ、また後者から転じて便りの意味で用いられている。元曲にでも同様「ふところ・袖の中」という意味で頻用されるが、ここでは單に「懷」というのと同じように、心を意味するようである。○觸突……『後漢書』「鄧禹傳」に「是以不敢觸突天威、而自竄山林、以俟陛下發神聖之聽、啓獨覩之明、拒讒慝之謗、絶邪巧之言、救可濟之人、援沒溺之命」とあるように、上の人に楯突く意味で用いられるが、元曲の用例は少ない。ただ本劇では第四折【金蕉葉】にも「則恐怕觸突着當今至尊」と見える。○兒突……各本見解を異にするが、音から考えても徐本の「冒突」が一番穏当であろう。徐校が引くように、「霍光鬼諫」（元刊本）第二折【么】の「敢大膽欺壓良民、冒突天顔」など、この語の用例は多い。鄭本が「觸突」とするのは、覆本が「免突」とするのに由来する。○直甚狗……意味を取りにくい。「直甚……」は、「救風塵」（古名家本）第一折【天下樂】に「我一世没男兒直甚頹」とあるように、「～になどあたらない」という意味でよく用いられる。従ってここは、「神獒を薬殺したところで犬というにもあたらない」ということになるが、それでは意味を取りがたい。無理に意味を通して、仮に「犬など何ほどのことがあろう」と譯しておくが、本来この語順ではそのような意味にはならないはずである。

〔訳〕〔（二度目の）使者が登場していう〕〔いう〕御使者のお言葉は誤りじゃ。

父君が心痛ませておられるようゆえ、我ら両人余計なことは言わぬ方

がよい。親子お二人、どのように申そうと、切っても切れぬ骨肉の絆。その子の胆をつかみだし心臓をえぐろうというに、何で心痛ませずにおられよう。皇后さまに楯突いたことについては公平に論じねばならぬ。天子さまに逆らったことについてはよく事情を問いただすべきであろう。宮女を死なせたことは罪に当たらぬ。神獒を薬殺したとて（犬など）何のことがあろう。

【尾】你今日道屠殺他這太子不怕難合口。〔帯云〕上天生我、上天死我。君王何不可。〔《唱》〕我怕甚伏侍君王不到頭。哎衆公卿衆宰侯。別人有家私不能勾。有妻男不能守。有功名不能就。宰輔臣僚、冒支請受。臣道君昏、怎生不奏。麗后心毒、獻公出醜。殺的是玉葉金枝、有好（如）楡柳。將鳳子龍孫、不如猪狗。尓等蒼生、眞乃禽獸。我已还（過）三十、不爲夭壽。爲主忠心、死而甘受。我博一个万載青（清）名、樣（煞）強如交万民咒。〔帯云〕我如今弃了身。弃了命。便死身亡。〔《唱》〕問甚您岡（剛）刀下闌朽。〔帯云〕割捨了訛言躁語。亢（抗）勅違宣、〔《唱》〕坩（怕）甚末金瓜下碎首。〔帯云〕既爲臣子。怎敢將主所殺。〔《唱》〕我將這行仁慈有道礼忒忠孝的申生我委實下不得手。

〔校〕○【尾】……鄭本は【隔尾】、徐・寧本は【黄鍾尾】とする。○伏侍……鄭本は「服侍」に作る。○不能勾……鄭本は、後に一字缺けているのではないかと推定している。○麗后……鄭本は「驪后」に改める。○有好楡柳……各本とも「有如楡柳」に改める。○已还三十……鄭・徐本は「已過三十」に改める。○万載青（清）名……各本とも「万載清名」に改める。○樣強如……各本とも「煞強如」に改める。○問甚您……徐本は「問甚末」に改める。○岡刀……鄭本は「剛刀」、徐・寧本は「鋼刀」に改める。○闌朽……各本とも「爛朽」に改める。○訛言課語……鄭本は「訛言躁語」に改める。○亢勅違宣……各本とも「抗勅違宣」に改める。○坩甚末……各本とも「怕甚末」に改める。○有道礼……徐・寧本は「有道理」に改める。

〔注〕○【尾】……曲牌は【隔尾】の方が妥当か（後ろから四句目の七言句がないが）。○合口……言い争う。口裏を合わせる。『董西廂』巻四【繡帯兒】「如今俺肯、推窮到底胡追究。思量定不必閑合口（どこまでもつまらぬ追及してもしかたない。考えてみれば余計なけんかはするに及ばぬ）」。○上天生我……邵雍「聽天吟」詩の「上天生我、上天死我、一聽於天、有何不可（天は我を生み、天は我をころす。ひたすら天に従えば、それでよい）」を踏まえる。○伏侍君王不到頭……成語。君王として最後まで仕えることができない。宋の曾慥『類説』巻五十六「赤松贈張良詩」には「楊安國爲翰林學士、以老欲求外官。告人曰、赤松子贈張良詩曰、不如閒早歸山去、免事君王不到頭。吾猶是矣（楊安国は翰林学士となったが、高齢を理由に外官になりたいと思った。人に告げて言うには、「赤松子が張良に贈った詩に、「早く山に帰るのがいい、君王に最後まで仕えられないということにならないように」とあります。私もちょうどこうなのです」）」とあり、また、『清平山堂話本』「張子房慕道記」に「不是微臣歸山早、服侍君王不到頭（それがし隠遁するのが早いのではありません。最後までお仕えすることができないのです）」とある。元曲では、「西蜀夢」（元刊本）第四折第三支【滾繡毬】「結交兄長存終始、俺伏侍君王不到頭。心暗（緒？）悠悠（兄上と生死を共にせんと誓ったものの、君として最後までお仕えすることがかないませんでした。思いは消えることがありません）」。○不能勾……鄭本がいうように意味を取りにくいが、一字缺とすると他の二句がいずれも「不能」の後に一音節語を置くのとつりあわなくなる。あるいは「勾」が別の語の誤りか。○冒支……横領、または不正受給すること。『元史』「刑法志四」「諸冒支官錢、計贓以枉法論、並除名不叙（公費横領、賄賂などは、法を曲げたということで裁いて、すべて除名して二度と官職につけない）」、『元典章』

「刑部九」「攪飛盗糧等例」「運糧船戸冒支糧石、十石以上杖九十七下（船舶の運搬を行う戸籍の者が食糧の横領をしたときは、十石以上の横領は杖九十七を課す）」というように、元来は法律用語であったと考えられる。○玉葉金枝……古い用例は単なる美称が多く、皇帝の家族を意味する例は意外に出現が遅い。『大金集禮』巻八「天徳四年冊命儀」の「玉葉金枝増福壽、共扶聖祚億千春（皇族がたは福寿を増し、ともに天子をとこしえにたすく）」はおそらくその例であろう。「金枝玉葉」であれば、『三朝北盟會編』巻一百五十四に引く呉伸の上書に「莫若以沿邊之郡十州之地建一諸侯、以宗室之親者主之。彼有人民、復有社稷、且耕且戰、足爲屏翰。上合天數、下安邊庭、金枝玉葉、布在四方、方可以伐敵國之謀、可以絶亂臣之望」とあるように、もう少し早くからこの意味で用いられていたようである。○好榆柳……このままでは意味を取りにくい。対から見ても各本のように「如榆柳」とするのが妥当か。ただし、それでも意味ははっきりしない。この語自体は並木や庭園に植えてある木を示すものとして古来頻用され、「三奪槊」（元刊本）第一折【勝葫蘆】に「密稠稠榆柳、齊臻臻長成行（密に並ぶ榆柳の木がずらりと長く列を作るところを駆けすぎる）」とあるように白話文学でもよく用いられるが、「如榆柳」という例はない。「榆柳を刈るように（もしくは燃やすように）」ということか。○已还三十……寧本は「已還」は「すでに」という意味の元代俗語だとするが、根拠は示されていない。この語を副詞的に用いる例は見あたらない。鄭・寧本のように「已過」に改めるのが妥当か。○不爲夭壽……『三國志演義』（嘉靖本）「白帝城先主託孤」「朕聞人年五十、不稱夭壽（五十歳なら若死にとは言わぬと聞いておる）」。○岡刀……鄭本は「剛刀」、徐・寧本は「鋼刀」に改める。「鋼刀」の方が一般的ではあるが、本劇第四折【調笑令】の帯白に「道它親孩兒替死向剛刀下刎（彼の実の息子は（ご主人様の）身代わりに剛刀のもとに自刎し）」とあるのをはじめ、「單刀會」（元刊本）第一折【金盞兒】に「項上按着剛刀（刀を押し当て）」、「東窗事犯」（元刊本）第二折【滿庭芳】に「尓將那英雄輩。都向剛刀下做鬼（お前は英雄たちを、剛刀のもとに殺し）」、同じく第三折の【鬬鵪鶉（原本は曲牌名を逸する）】に「子落的剛刀下斬首（剛刀のもとに首を斬られることになり）」とあって、元刊本ではむしろ「剛刀」の方が普通である。また『晉書』「赫連勃勃載記」に「又造百鍊剛刀、爲龍雀大環、號曰大夏龍雀」とあるのをはじめとして文言の用例も多く、「剛刀」が妥当ではないかと思われる。○訛言躁語……「訛言課語」とも。でたらめな話。元曲では、「七里灘」（元刊本）【鬼三台】「休停住。疾廻去。不去呵枉惹的我訛言躁語（とどまるな。早く帰れ。行かねばわしからつまらぬことを言われるはめになるぞ）」という例があり、また『宣和遺事』前集には「咱家里有課語訛言的、怎奈何（うちにでたらめを言う客がきているけど、どうしよう）」とある。「訛言」は『毛詩』「小雅」「沔水」に「民之訛言、寧莫之懲（民の流言、どうして正さぬ）」とあるように、事実無根のうわさ話が本来の意味。「三奪槊」（元刊本）第四折【快活三】には「我這里曲躬躬的朝拜怎敢訛言（わたしはここに深々とお辞儀をして滅多なことは申しませぬ）」という用例がある。○將主所殺……「所」の用法が興味深い。「所算」同様二音節化するためについているものか。○この唱のあとで、申生殺害を拒絶した正末は、自害するか殺されるのであろう。

〔訳〕おぬしは今日、太子様を虐殺しようと言い争いできると申す。［いれぜりふ］「天が我を生かし、天が我を死なせる」とやら、何事も殿のおおせのままか。［唱う］殿へのご奉公を全う出来なかろうと構うものか。大臣貴人の皆様方は財産を持っているが私は持っていない。妻子を持っていても私は無い、手柄を立てても褒美にも与れぬというに、いわれもなく給料をただ取りしておられる。臣下の身で殿がどうかしておられるのを見て、何も申さずによいものか。麗后さまは非道の心、献公さまは恥さらし。金枝玉葉の御身を、榆柳を刈るように殺し、龍鳳の御子孫に、

豚や犬にも及ばぬ死に様させようとは。きさまら平民どもは、まこと獣同然じゃ。わしはもう三十を過ぎた身、ここで死んでも早死にとはいえまい。ご主人様に忠義を尽くし、死んでも本望じゃ。万年の先まで名を残すことかなうなら、万民の呪い受けるよりずっとまし。［いれぜりふ］今身を捨て、命を捨て、この場で死んでくれようぞ。［唱う］きさまらの刃の下で朽ち果てようと構わぬわ。［いれぜりふ］思い切って不埒なことを申し上げ、勅命に背いてくれようぞ。［唱う］金瓜の下で首を砕かれようと構いはせぬ。［いれぜりふ］臣下たる身で、何でご主人様を手に掛けられようか。［唱う］わしはこの慈悲深く、物がお分かりで、あまりといえばあまりに忠孝なる申生さまに、わしはまことに手を下すことはできぬのじゃ。

［外云拄（住）］［申生自刎了］［駕一行上］［淨奏住下］

［校］○外云拄……鄭・寧本は「外云住」、徐本は「使臣云住」に改める。

［注］○外……徐本は「使臣」に改めるが、外＝使臣で問題はないであろう。おそらくここで申生に自害を強要するものと思われる。○淨……ここで申生の自害を報告するのであろう。

［訳］［外がいう］［申生自害する］［駕と一同登場］［淨が上奏する。退場］

赤松紀彦（京都大学高等教育開発推進センター教授）
金　文京（京都大学人文科学研究所教授）
小松　謙（京都府立大学文学部教授）
佐藤晴彦（神戸外国語大学外国語学部教授）
荀　春生（摂南大学外国語学部教授）
高橋繁樹（摂南大学外国語学部教授）
高橋文治（大阪大学大学院文学研究科教授）
竹内　誠（京都外国語大学外国語学部教授）
土屋育子（佐賀大学文化教育学部准教授）
松浦恆雄（大阪市立大学大学院文学研究科教授）